

坂本真綾

Special Interview

デビュー15周年“人生最大の出来事”を乗り越えたマーヤが今だから気づけたこと

純度の高いプラチナのような楽曲を生み出し続けてきた坂本真綾が、デビュー15周年を迎え、30歳の誕生日である3月31日に2枚組ベストアルバム『Everywhere』をリリース。同日に初の日本武道館公演も控える彼女に、15年の軌跡を振り返ってもらった。



PV

「Everywhere」

Artist Page

Community

Official Site

● 10代の頃はまだ分からなかった“崖っぷち”が分かるように

——デビューした頃は高校生でしたね。

【坂本】 普通の学校生活を送っていました。周りも私がこういう活動をしていることは気にしてなくて、放課後はみんなで高校の近くのファミリーレストランにたまったり。ただ、その店の大きなビジョンに「Feel Myself」のPVが流れることになっちゃって。そのときはすごくイヤでした(笑)。

——そんな頃から15年間の作品を集めたベスト盤ですが、歌っていた当時と今とでとらえ方が変わったような曲はありますか？

【坂本】 “10代の自分はどう考えていたのかな？”と思うのは「ユッカ」ですね。普遍的なテーマの深い歌詞なので。あと、「ヘミソフィア」はよく分からないまま、反射だけで歌っていましたね。すごく変わった曲というイメージで、勇まし過ぎてあいつらは〜とかどう歌えばいいんだろう？と。自分とは少し離れてる感じがしていました。



ヘミソフィア

——そうですか？<僕は僕のことが知りたい>とか、真綾さんが自分で書く内省的な詞とも通じている気がします。

【坂本】 詞の意味が分からなかったわけではないんですけど、当時の自分はそこまで<崖っぷちに立たされた>こともなかったし、ものすごく共感するという感じではなかったんですね。「この曲を聴いて勇気づけられました」という手紙をいっぱいもらって、そういう歌として届いているのが意外でした。昨年久しぶりに菅野よう子さんのライブで歌ったら、今の自分にはスツと馴染む感じがしましたけど。

——今は崖っぷちに立つ経験もしたから？

【坂本】 そうですね……まあ、いろいろと(笑)。

● 菅野さんから離れたのは「人生最大の出来事でした」



少年アリス

——今回のベストにも、歌っていた当時は実は煮詰まっていた…という曲があったり？

【坂本】 「光あれ」の詞は、閉塞感というか、追い詰められた心境のときに書きました。ミュージカル(レ・ミゼラブル)に挑戦した時期でもあって、未知との遭遇で挫折感も味わって。音楽のほうでも、自分が積み上げてきたつものものがガラガラと……ゼロになってしまったように感じていたんです。

——でも、「光あれ」って、すごく大きな想いを歌っていますよね。

【坂本】 当時ファンクラブも立ち上げて、予想を遥かに越える数の方

が入会してくれて。嬉しい反面、“こんなに自信のない私が、こんなに期待されているの？”と思いました。でも弱音を吐くわけにはいかない…という気持ちが逆に強く出て、『少年アリス』には「光あれ」の他にも、吠えているような歌詞が多いんです(笑)。アルバムとしては骨太に聴こえて良い方向に作用したけど、当時はメッセージを発したくても、せいぜい“いつか”歩いてみせる……としか書けない。「光あれ」と言いつつ、光が全然ない状態の私でした(笑)。

——でも今は光あふれる状態に？

【坂本】 いろいろなことがクリアになってきているとは思いますが。菅野よう子さんのプロデュースが『少年アリス』まで。そこから自分の足で歩き出して、またたくさんの未知との遭遇が始まり、大変な思いをしながら、刺激もいろいろ受けました。そういうことを経て、自分に対する信頼が戻ってきた感じです。

——菅野さんプロデュースから離れたことは、大きな決断だったかと思いますが。

【坂本】 人生最大の出来事でしたね。でも、そうするしかない感じが、私にも菅野さんにもありました。当時の閉塞感の一部には、「いいアルバムだね」と言われても“自分が評価されているわけじゃない”という冷めた気持ちがかどこかにあって。一方で“頼れば何とかしてくれる”と逃げ道にしていた部分もあったし。自分で何もしないまま、大人になろうとしている。そんな状況を変えないことには先はない、という。もちろん不安でした。「菅野さんとやってたときのほうが良かった」と言われるかも……と思わないわけがない。だけど、自分なりの居場所が見えるまでやってみたい。ダメならそれまでのことだと、腹をくりました。

Next 真綾思わず涙……その真相とは？

続きを読む >

(文: 斉藤貴志)

坂本真綾

Special Interview

デビュー15周年“人生最大の出来事”を乗り越えたマーヤが今だから気づけたこと

純度の高いプラチナのような楽曲を生み出し続けてきた坂本真綾が、デビュー15周年を迎え、30歳の誕生日である3月31日に2枚組ベストアルバム「Everywhere」をリリース。同日に初の日本武道館公演も控える彼女に、15年の軌跡を振り返ってもらった。



PV
「Everywhere」

Artist Page

Community

Official Site

● 15周年を迎えて、すべてのことに意味があったと気づけた

—それが今回新録した「ループ」の頃？

【坂本】あの曲は2度目のデビュー曲のように感じていて。今回のレコーディングでは思いがけず、歌い始めたら泣いてしまいました。また1からいろいろなものを作ってきて、15年目にして振り返ると、菅野さんと過ごした9年とその後の6年 が繋がっていた。すべてのことに意味があったと思います。「ループ」の頃は前しか見えなくて、過去の曲は聴きたくなかったから、そう思えるようになって良かったなど。

—そんななかで、真綾さんの音楽性に影響を与えたものって、何かありますか？

【坂本】毎回そのとき観た映画とか、少なからず影響は受けていると思うんですけど、音楽は普段あまり聴かないんですよね(笑)。ただ、スピッツの草野マサムネさんや、THE BLUE HEARTSの甲本ヒロトさんの歌詞はすごく好きです。

—今回の新曲「everywhere」は、作曲も初めて自ら手掛けてますね。

【坂本】昨年のツアーの後、1人で5週間ヨーロッパを旅していたときにできました。ローマ郊外の民宿みたいなところで、たまたま置いてあったピアノを何となく弾いていたら、不思議にスルスル出てきて。久しぶりに仕事を休んで、過ごした旅の間に考えていたことが、詞と曲一緒になってスーッと。



ループ

● 歌手・声優・女優…すべてが自分の居場所と思えるように



ときの気持ちですね。

—<ふるさとis everywhere>と出てきたわけですか。

【坂本】私は仕事が好きだし忙しいのも好きだけど、帰れば無条件に心安らぐ“ホーム”みたいな場所ってないかもしれないなって、最近では思っていたんです。精神的にも、たとえば音楽や舞台の仕事をしていても「でも声優さんだから」と言われ、声優の仕事をしていても「歌手だから」と言われ、なんとなくどこに行ってもアウェイな感じがつきまとう。それほど深刻な悩みだったわけではないんですが、自分をまるごと受け止めてくれる、ふるさとみたいなものがあつたら…という思いもあつたんです。でも、1つの場所を探し求めるのではなく、すべての場所が自分のホームだと思ってもいいんじゃないかと。それが、この曲を書いた

—そのままアルバムタイトルにもなって。

【坂本】パッと見た単語の印象でベスト盤の雰囲気があって、他にもいろいろな解釈をしてもらえそうだったから、スッキリ決めました。

——発売日＝誕生日に初の武道館公演もあります。どんなライブになりそうですか？

【坂本】今回は15周年で懐かしい曲をたくさんやりますし、長年のファンの方はイントロを聴いただけで“オーっ！”と言ってくれるライブになりそうです。

——今後さらにアーティスト人生は続きますが、武道館まで終わったら、今しばらくは15年の思い出に浸っていたい気持ちもあります？

【坂本】全くないです(笑)。ベストアルバムのマスタリングまで終わって、全部通して聴いたとき、達成感のすぐ後で思ったのが“早くオリジナルアルバムを作りたい！”っていう(笑)。ベストを作るのも面白かったし、いろいろ感慨深いんですけど、新しい曲は少なかったから、もっと作ることに早く挑みたくて。やっと見えたものを逃がさないうちに早く次へ——と思っています。

[< Back](#) [最初から読む](#)

(文：斉藤貴志)